現代日本論／比較現代日本論演習 II「質問紙調査の基礎」2013 年度 (2 学期)

第 6 講　質問文と回答欄 (11/7)

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[テーマ]　質問文を作成する

1　課題

つぎの各項目についてたずねる質問文 (および回答欄) を考える。調査対象としては、東北大学の日本人学生を想定すること。

- 出身地 (言語使用についての分析に使う目的で)
- ら抜きことばに対する意識
- 授業スタイルに関する好み
- 外国語会話に関する苦手意識

2　質問文作成上の注意

2.1　用語について

(1) 明確な質問
(2) 日常的なことばで
(3) ステレオタイプ的な表現を避ける

2.2　文章について

(1) Double-barreled question を避ける → ひとつの質問ではひとつの事柄だけを聞く
(2) 短く、意味のつかみやすい文章に
(3) 誘導尋問を避ける
(4) 黙従傾向に注意

2.3　質問のタイプ

(1) 個人的質問 vs. 一般的質問
(2) 意識 vs. 実態
(3) actual status vs. usual status
(4) 単一質問 vs. 複数質問群

3　いろいろな回答形式

3.1　自由回答とアフターコード

回答欄に自由に答えを書いてもらい、あとで値をあたえる (after-coding)。回答の予想がつかない場合、選択肢が多すぎる場合 (職業など)、数値をそのまま記入してもらう場合 (年齢など) に有効

自由回答の利点：

- 多面的な把握が可能
- 詳細な情報が得られる
- 誘導尋問になりにくい
- 回答者が不満を感じにくい

自由回答の欠点：

- 回答者の負担が大きい
- さまざまな次元の回答が混入する可能性
- 回答が標準化できない

3.2　回答選択肢 (プリコード)

あらかじめ回答の種類を制限して、値をあたえておく (pre-coding)。

- ひとつの準拠枠に沿って標準化した反応が引き出せる
- 回答者の負担がすくない
- 想定外の反応を抑制してしまう

「その他」などの選択肢を設けて、一部自由回答を併用することもできる。

プリコードの場合の注意事項

- ひとつだけ選択 (single answer) か複数選択 (multiple answer) か
- ありうる回答を網羅しているか?
- 選択肢は相互に排他的か?
- 間隔尺度としてあつかうには、最低限 4 つの選択肢が必要
- 選択肢が多すぎると回答者の負担が大きい (7 つ以下がいちおうの目安)
- 不明・回答拒否を選択肢に入れるか?
- 選択肢のレイアウト
- 一対比較

4　宿題

自分の関心に沿って、質問項目を列挙してくる。完全な質問文になっていなくても、おおよそどのようなことを聞きたいかが書いてあればよい。2 部作成して次回持ってくること (1 部は提出、もうひとつは授業で使用)。

今日提出した企画書から変更がある場合は、その部分についても説明すること。